

主論文

The Relationships among Internalized Stigma, Sense of Coherence, and Personal Recovery of Persons with Schizophrenia Living in the Community (地域で生活する統合失調症者の内面化したスティグマと SOC およびパーソナルリカバリーとの関連)

[緒言]

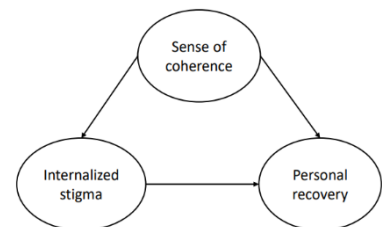
統合失調症者の地域生活において重要な概念の一つに「パーソナルリカバリー (personal recovery: PR)」がある。PR とは単に疾患になる前の状態に戻るのではなく、発病前の自身を超える成長をも含んでいる。しかし、統合失調症者の地域生活には未だ課題が多く、法律や制度が整備される一方で、特定集団の当事者である自身に対する否定的な考え方である「内面化したスティグマ (internalized stigma: IS)」は根強く残っている。そこで、Antonovsky によって提唱された健康生成論の中核概念である SOC (sense of coherence: 首尾一貫感覚) に着目した。

IS、SOC、PR の 3 つの概念に共通するのは「自身の生活や経験をどのように捉えているか」という点と考えられる。PR は社会との関係性の中で促されていくため、生活世界全般への志向性である SOC や、社会との関係から生じる IS へのアプローチ方法の検討が、新たな地域生活支援の検討につながると考えられる。

[対象と方法]

1. 仮説モデル

健康生成モデルを参考に、IS が PR に関連し、SOC は IS にも PR にも関連するという仮説モデルを設定した。



2. 対象施設および対象者の選択基準

「日本精神科病院協会」ホームページより「中四国地方の精神科デイケア・ナイトケア等」のうち、同意の得られた 15 施設を研究協力施設とした（承諾率 16.0%）。研究対象者は、統合失調症の病識を持ち、精神科デイケアを半年以上利用しながら地域で生活している 18 歳以上の者とした。

3. データ収集方法および期間

研究協力施設の病院管理者およびデイケア管理者を通して、対象者に調査票を配付し、回答後は郵送により個別に回収した。2022 年 9 月～2023 年 2 月に実施した。

4. 調査票の構成

調査票は「IS」「SOC」「PR」「基本属性」から構成した。

1) IS

精神障害者の内面化したスティグマ尺度 (the Japanese version of the 10-item Internalized Stigma of Mental Illness Scale(ISMI-10)) を用いた。「内面化したスティグマ」8項目、「スティグマ抵抗」2項目で構成される。各項目は「1: 全くそう思わない」から「4: 非常にそう思う」までの4件法で回答する。各項目の得点を合計してから、回答済の項目の総数で割り、結果の得点(平均点)は1~4点の範囲となる。

2) SOC

日本語版 SOC スケール 13 項目を用いた。「把握可能感」5項目、「処理可能感」4項目、「有意味感」4項目で構成される。各1~7点で回答し、13~91点の範囲となる。

3) PR

QPR-J と SWNS-J の 2 つの尺度を用いた。

日本語版リカバリープロセス尺度 (The Japanese Version of the Questionnaire about the Process of Recovery (QPR-J)) は「intrapersonal」17項目と「interpersonal」5項目で構成される。各項目は「0: 全くそう思わない」から「4: とてもそう思う」までの5件法で回答し、0~88点の範囲となる。

抗精神病薬治療下主観的ウェルビーイング評価尺度短縮版日本語版 (Subjective Well-being under Neuroleptic drug treatment Short form, Japanese version (SWNS-J)) は「精神機能」「セルフコントロール」「感情調節」「身体機能」「社会的統合」各4項目で構成されており、「まったく違う」から「とてもそう感じる」の6件法で回答し、20~120点の範囲となる。

4) 基本属性

年齢、性別、住環境、同居者の状況、婚姻状況、教育歴、抗精神病薬の使用状況および使用感、精神科初診年代、通院頻度、入院経験の有無、デイケア利用歴・頻度、デイケア以外の利用サービス、居場所感について尋ねた。居場所感は「精神に病を持つ人の居場所感尺度」を用いた。8項目を「1: あてはまらない」から「4: あてはまる」の4件法で回答し、8~32点の範囲となる。

5. 統計解析方法

基本属性と IS、SOC、PR との関連について検討した。次に、IS、SOC、PR の各変数間の関連について相関係数を算出し検討した。また、3 概念間の関連は構造方程式モデリングにより検討した。モデル適合度の判定には GFI (Goodness of Fit Index)、CFI(Comparative Fit Index)、RMSEA(Root Mean Square Error of Approximation)を採用した。統計解析用ソフトは IBM SPSS Statistics28 および Amos28 を用いた。

[結果]

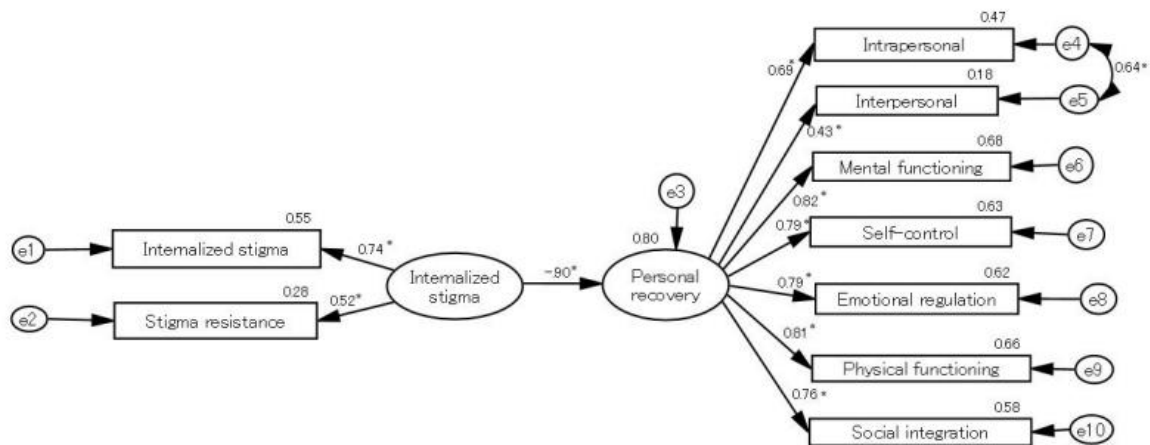
1. 対象者の基本属性と各変数の得点

研究協力施設 15 施設 270 名の対象者に調査票を送り 149 名から回答を得た（回収率 55.2%）。対象外の回答を除いて 140 例を分析対象とした（有効回答率 94.0%）。

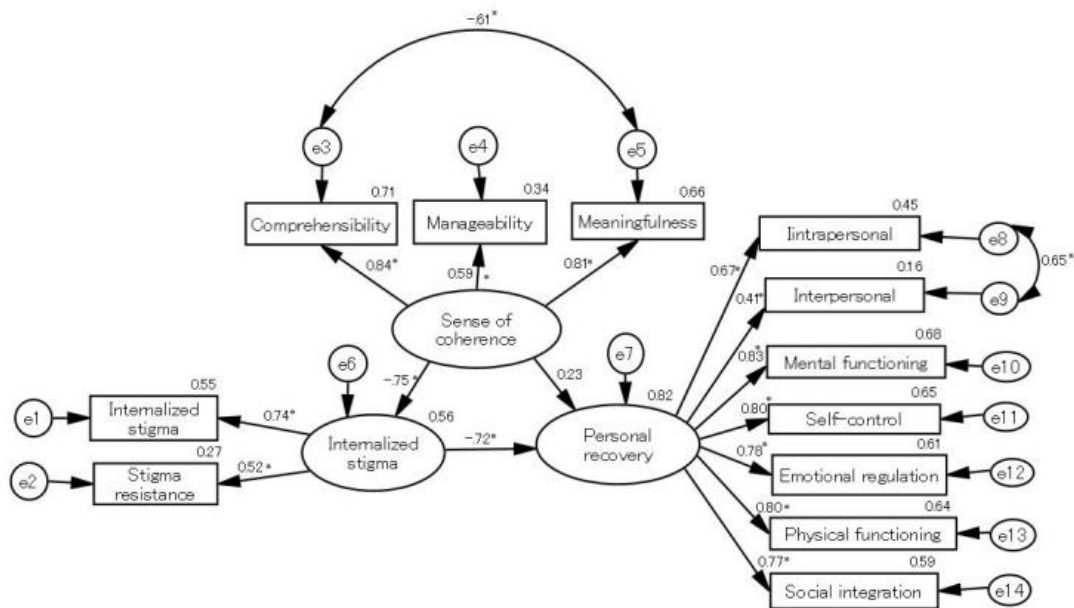
本研究の対象者は平均年齢が 54.3 ± 11.7 歳であり、60%以上が男性であった。20 代で精神科を初診したものが最も多く、現在の受診頻度は 40%強が月に 1 回程度であった。デイケア利用歴は 8.3 ± 7.0 年であり、利用頻度は 3.3 ± 1.7 回/週であった。デイケア以外のサービス利用状況として、半数以上のものが使用していたのは、訪問看護、障害年金、精神障害者保健福祉手帳であった。基本属性と各変数との関連では、居場所感が IS、SOC、PR のすべての変数と有意差があった（ $r = -0.358 \sim 0.611$ ）。

2. IS、SOC、PR の関連

まず、IS と PR の関連について構造方程式モデリングにより分析した。修正後のモデルでは、 $\chi^2(25) = 45.780$ 、 $p = 0.007$ 、GFI=0.939、CFI=0.969、RMSEA=0.077 であり、すべてのパスは $p < 0.05$ で有意であった。



次に、このモデルに SOC を加えて、IS と SOC および PR の関連について検討した。修正後のモデルでは、 $\chi^2(49) = 95.540$ 、 $p = 0.000$ 、GFI=0.900、CFI=0.948、RMSEA=0.083 となった。SOC から PR へのパスは $p = 0.291$ と有意でないものの、それ以外のパスはすべて $p < 0.05$ で有意であった。PR の説明率は 82%であった。SOC から IS、IS から PR にはいずれも負の関連がみられ、SOC の間接効果が確認された。



[考察]

1. 対象者の背景と IS、SOC、PR との関連

本研究において中等度以上の IS をもつ者は約 20%であり、IS と PR には負の相関があった。薬が自分に適していると感じている者のほうが QPR-J 得点が有意に高い結果であり、服薬アドヒアランスに関する情報を当事者に丁寧に尋ねて対応していくことで、IS の軽減もしくは PR 促進につながる可能性がある。本研究における対象者の SOC および PR に関しては先行研究と概ね同様の得点であった。

2. IS と SOC および PR の関連について

3 概念間の構造方程式モデリングでは、SOC が直接 PR を促すのではなく、IS の影響を軽減することで間接的に PR につながると解釈することが妥当と考えられた。統合失調症者の自己概念や地域生活継続に関する研究でも、自身の障害を受け入れにくく、他人からは自身の経験や行動を理解されにくいと感じつつ、世間の目を気にしながら生活していることが報告されており、PR が阻害されやすい環境にあることが伺われる。

3. 実践への示唆

看護実践としては、IS の軽減および SOC への介入の 2 つのアプローチが考えられる。

まず、IS の軽減アプローチであるが、本研究において居場所感が各変数と関連しており、居場所としてのデイケア活用が重要と考えられる。自身の経験をグループで共有する機会をもつことも本人の主体性に働きかける活動と考えられる。当事者間の相互作用を促す関わりも IS 軽減に役立ち、結果として PR へとつながると思われる。

SOC へのアプローチについても、健康生成論に基づくプログラムや面談による効果が報告されている。本研究結果からも SOC への意図的な介入の有効性が示唆された。

[結論]

SOC は直接 PR を促すのではなく、IS の影響を軽減することで PR を促進すると考えられた。支援者は、自身の支援内容を振り返るとともに、活動を通して地域で生活する統合失調症者が自身の経験を振り返る機会をもち、グループ内でその経験を共有できるようにしていくことで、統合失調症者の IS の軽減および SOC の向上へとつながり、PR が促進される可能性が示唆された。